

高校での学力の3要素・英語4技能の育成と評価の取り組み例

右ページで紹介した授業改善以外に、高校では入試改革を見据えた取り組みがすでに始まっている。

学校名	思考力等*1の育成と評価	主体性等*2の育成と評価	英語4技能の育成と評価
茨城県立 下妻第一高校 設立:1897年 生徒数:1学年約280人 大学合格実績:東北大、茨城大、筑波大、東京大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、東洋大、日本大、法政大、明治大、立教大、早稲田大など	【育成】 ▶1年次に履修する全教科・科目について、各分野・単元で育成する思考力等の資質・能力をまとめた教育課程表を作成。それをもとに思考力等の育成につながるよう授業を改善 ▶例えば日本史では、4、5時間に1回程度、授業の最後に記述する時間を設けるようにして、記述力と思考力を育成 【評価】 ▶2016年度に定期考査の問題を見直し、全教科で記述式問題を出題する方向とした	【育成／評価】 ▶大学入試に対応するためだけでなく、生徒が自らのあり方を振り返り、考え、気づき、成長することを後押しするツールの1つとしてポートフォリオを捉え、課外活動や定期考査、模擬試験、学校行事の振り返りで活用	【育成】 ▶4技能別のCAN-DOリストを作成し、各時期の到達目標を明確化。最終到達目標はCEFR**3のB1に設定 ▶1年次の秋に2泊3日で「イングリッシュ・セミナー」を実施。学校紹介などのスピーチを行うことで4技能への生徒の意識を高める 【評価】 ▶1年次6月、12月(全員)、2年次12月(全員)、3年次6月(希望者)に外部英語検定試験を受検
長野県 上田高校 設立:1900年 生徒数:1学年約360人 大学合格実績:東北大、東京大、東京外国語大、東京藝術大、信州大、大阪大、慶應義塾大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大など	【育成】 ▶SGH**4の活動の一環として、課題研究に全生徒が取り組むほか、台湾(2年次全員参加)や、フィリピン、アメリカ・ボストンでの海外研修(1・2年次選抜制)を実施 【評価】 ▶2017年度の定期考査から、全教科で必ず1問は思考力・判断力・表現力を測る問題を出題するようにした	【育成／評価】 ▶SGH活動の自己評価(年3回)や、課題研究のまとめとして作成する「学びの報告書」などをポートフォリオに蓄積 ▶多様な経験を振り返り、「自分はどうのように成長を遂げたのか」を他者に伝えるようにまとめる表現力の育成にも力を入れている	【育成】 ▶英語4技能を総合的に伸ばすように授業を工夫。例えば、全体での音読→要点を英語で説明し合うペアワーク→説明内容を英文で書く個人ワーク→その英文をグループで回し読みし、感想を英語で伝えるなど 【評価】 ▶1、2年次に外部英語検定試験を全員受検。2018年度からはスピーキングを加えた4技能で受検
京都府 京都産業大学 附属中学校・高校 設立:2007年 生徒数:1学年約380人 大学合格実績:京都大、大阪大、神戸大、京都府立大、明治大、中央大、関西大、京都産業大、近畿大、同志社大、立命館大、龍谷大など	【育成】 ▶自校の高校入試において、思考のプロセスを記述させる問題を多く出題 ▶これまで以上に確かな記述力を育成するよう、教科ごとに授業を改善。例えば現代社会では、高校1年生の冬休み課題に、「2018年はこういう年になる」というテーマのコラム執筆(250字程度)を課す	【育成／評価】 ▶進学コースでは、定期考査や模擬試験、各教科の成果物をファイルにとじるポートフォリオの作成をこれまでも行ってきた ▶今後は、課外活動や個人的な活動についてもポートフォリオの取り組み範囲を広げていく ▶そのためのしくみとして、1学年からeポートフォリオを導入	【育成】 ▶従来から4技能統合型の指導を推進してきたが、課題のスピーキング強化の一環として、2018年度1年次から授業のほかにオンライン英会話レッスンを導入 【評価】 ▶進学・特進の全コースで外部英語検定試験を受検
広島県立 祇園北高校 設立:1983年 生徒数:1学年約320人 大学合格実績:九州大、愛媛大、広島大、岡山大、山口大、島根大、神戸大、京都大、広島市立大、県立広島大、広島工業大、広島修道大、広島女学院大、安田女子大、広島国際大、近畿大など	【育成】 ▶2015年度から広島県教育委員会の学びの変革パイロットハイスクールとして研究指定を受け、ICEモデルを取り入れた独自の授業デザインにより組織的に授業づくりを推進。知識をつなげ、新たな価値を提案するところまで、学びの質を高めることをめざしている 【評価】 ▶ICEモデルのE(応用、広がり)フェーズの問題を定期考査でも出題	【育成／評価】 ▶2017年度にeポートフォリオを一定期間、試験的に導入 ▶個人のリフレクションだけでなく、グループでのリフレクションを活性化させるしくみを模索中	【育成】 ▶各学年の4技能別のCAN-DOリストを作成し、3年間の達成目標を明確化している 【評価】 ▶2018年度から外部英語検定試験の1年次全員受検をスタートさせる予定

*1 思考力・判断力・表現力等 *2 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度 *3 ヨーロッパ言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages) *4 スーパーグローバルハイスクール ※下妻第一高校、上田高校、京都産業大学附属中学校・高校の取り組みは、ベネッセ教育総合研究所「VIEW21」2018年4月号掲載記事より抜粋したもの

新入試世代入学 変わる！ 高校の授業

高校の授業が変われば、高校生は変わる。高校の授業はどのように変わろうとしているのか、その実践例を紹介する。

知識の蓄積と活用のバランスを見直す

高大接続改革の中で高校には、知識の蓄積に偏ることなく、活用とのバランスが取れた授業へと転換することが求められています。知識の蓄積は自己完結する学びで、わからないことをなくしていく、言わば、先細りする学習です。一方、知識の活用は、習ったことを他者に対してどう生かすかを考える、未広がり(未だ)の学習です。これらをバランスよく組み合わせることで、主体性や思考力など、これからの社会を生き抜くために必要とされる資質・能力が育成されます。

授業が変わることで 質問する生徒が増加

こう考えたのも、本校では、2年前からICE(アイス)モデルを授業に取り入れていました。これはカナダで開発された学習・評価モデルで、Iは考え・基礎知識、(Ideas)、Cはつながり(Connections)、Eは応用・広がり(Extensions)を意味します。例えば日本史では、「I:享保の改革は何年の出来事ですか?」「C:江戸幕府が260年も続いたのは、なぜだと思いますか?」「E:幕府が財政危機です。あなたが老中だったらどうしますか?」となります。I、Cは自己完結しますが、Eは外界や他者に

働きかける可能性を拓きます。授業設計では最初にEの問いからつくり出します。各単元の学習が最終的に知識の活用へとつながるよう展開を組み立てるためです。

定期考査の問題も変えました。Eの問いを、各教科I割程度は入れています。大学入試問題もICEで問いを分類し、各大学の出題傾向を分析しています。生徒も変わってきています。一番の変化はものごとをうのみにせず、質問する生徒が増えてきたことです。統計表を使った授業では、生徒から「その数値は本当ですか?」と出典確認の質問を受けることがあります。講演会にいられた外部講師の方は、生徒からの質問の多さに驚かれます。主体的にものごとを考える姿勢が育つていくことの表れだと捉えています。今までのやり方を変えることは

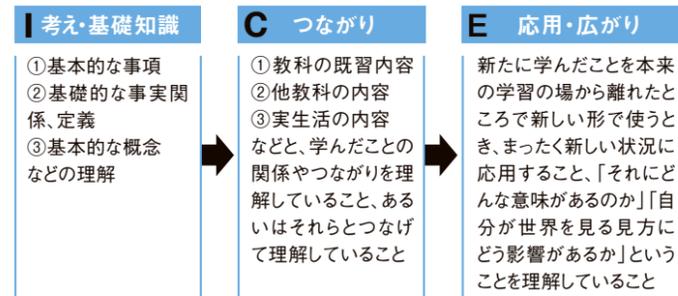
大変な労力を必要とします。しかし、こうした生徒を育てることが未来の日本を活気づけることにつながると信じています。



広島県立祇園北高等学校 校長 柘磨昭孝
 たるまきりのり ●1983年広島大学大学院理学研究科修了。2007年文部科学大臣優秀教員表彰。2014年広島県立安芸高等学校校長を経て、2016年から現職。

取材・文・撮影 / 本間学

ICEモデルの3つのフェーズ



*2015年度広島県教育資料より。広島県では「課題発見・解決学習」の質をより高めるために、ICEモデルの活用を提唱している